目次

巻頭言　　実用英語教育学会　会長　　釣　晴彦

第 11 回 実用英語教育学会(SPELT)研究会　報告
(2022 年 6 月 12 日　zoom によるオンライン開催)

ビジョン 3－16：　あらためて外国語教育の理念と目的と方法論を問う

1．講演
『破壊的創造の時代の外国語教育:　「なぜ」、「何」、「どう」』
當作 靖彦 教授　(カリフォルニア大学サンディエゴ校)
(報告　実用英語教育学会　三浦　寛子)

2．その他

・　会員募集について

・　編集後記

巻頭言

実用英語教育学会　第 11 回研究会を終えて

実用英語教育学会会長　釣　晴彦
札幌学院大学人文学部 特別任用教授

6 月の研究会もオンラインの Zoom にての研究会になりました。日曜日のオンラインによる研究会に３３名の方に参加して頂き、感謝申し上げます。前回同様に大変有意義な研究会になり役員一同喜んでおります。

今回は、カリフォルニア大学サンディエゴ校の教授である當作靖彦先生に講演を依頼しました。先生は、第二言語習得理論と外国語教授法の専門家です。7 年前に「学習を促進する評価のデザイン」との表題で講演とワークショップをして頂きました。その縁で、このコロナ禍の世の中をアメリカでどのように活動されて、どう考えて実践されているか、再度、是非お話をしてもらいたいとの実用英語教育学会役員の要請を受けていただき、アメリカから Zoom のライブ講演になった訳です。先生の書物『NIPPON3.0 の処方箋』に、SNA ソーシャルネットワーキングアプローチが日本を救い、人を育てると書かれています。今は「society5.0」の社会になりました。この講演で先生は、このコロナ感染のパンデミックで SEL（Social Emotional Learning）のアプローチがとても大事になってきたと話されました。授業と学習の好循環を実現させるためには、SEL の能力を高めることで学習効果を高め、良い学習結果を生み出すことに繋がるのだと力説されました。

今回の「破壊的創造の時代の外国語教育」というテーマの講話を学会の役員が、文章にして上手にまとめてくれました。貴重な提言内容になっていますので、是非目を通して見てください。私は、iPS 細胞の研究者である山中伸弥さんが、以前テレビ番組で「vision and work hard」について語っていたのを思い出しました。Work hard だけでは成果を上げることには繋がらない。必要な事は研究の vision であると、当時の山中伸弥さんのアメリカ研究所の上司が語ったことが今の山中さんの研究の原動力になっていると話しておられました。

まさに當作靖彦先生が講演で語っていた内容に通じるものがあると思います。コロナ感染のパンデミックで可視化された社会は、以前の生活と比べてもかなり閉塞感が漂っています。むしろネガティブな動きが多い教育界ですが、先生の講演は今後の展望や外国語教育の方向性に希望を感じられる内容でした。そしてとても勇気を与えられました。

小、中、高、大で教壇に立つ会員が、なぜ外国語教育をするのかというビジョンを相互に明らかにして、つながり、情報や手法を共有して、さまざまな領域と水準における英語教育の実践と研究を行い、共に学んで歩んで行ければと、この講演を通して再認識しました。今後も皆さんのご指導、ご支援を一層賜りますようお願い申し上げます。

第 11 回研究会 ＜講演＞

『破壊的創造の時代の外国語教育: 「なぜ」、「何」、「どう」』

講師：當作 靖彦 教授 （カリフォルニア大学サンディエゴ校）

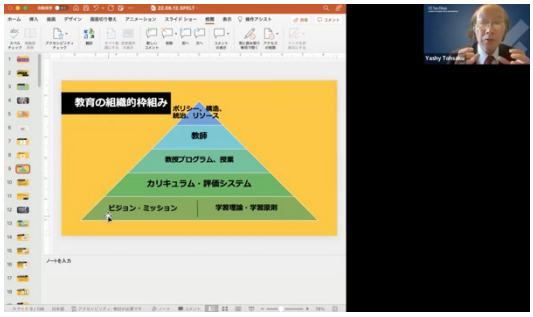
講演者プロフィール

カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）グローバル政策・戦略大学院(GPS)教授。同校言語学部大学院修了（Ph.D.）。専門は第二言語習得理論及び外国語教授法。アメリカの日本語ナショナル・スタンダーズの作成に参加、現在、外国語ナショナル・スタンダーズ理事会日本語代表理事、コンピュータと日本語教育学会会長、一般社団法人日本外国語教育推進機構（JACTFL）の理事を務める。Association of Teachers of Japanese 会長、外国語教育ロビー団体 Joint National Committee on Languages 日本語代表、全米日本語教育学会会長等を歴任。“Yookoso!: Invitation to Contemporary Japanese”。“Yookoso!: Continuing with Contemporary Japanese”（McGrow-Hill Higher Education）。『ＮＩＰＰＯＮ３．０の処方箋』（講談社）、『ドラえもんのどこでも日本語』（小学館）、『日本語教師の専門能力開発：アメリカの現状と日本への提言』（日本語教育学会）、“Social Networking Approach to Japanese Language Teaching - The Interaction of Language and Culture in the Digital Age”（Routledge）等の著書がある。2015 年第 13 回日本語教育学会賞受賞。2021 年 American Association of Teachers of Japanese Lifelong Achievement Award 受賞。

以下、ご講演の内容を紹介します。

アメリカでは小学校の先生が 1 日に 3,000 もの質問をするという調査結果があります。これは脳神経外科医が手術中にする質問の数より多いそうです。質問と言えば英語では 5W1H が思い浮かびますが、その中で WHY の質問が一番難しく、レベルが高いと言われています。今日は、WHY「なぜ外国語を教えるのか」と言う問い、HOW「どうやって教えるのか」、そして WHAT「何を教えるのか」についてお話しします。

新米の先生は教科書選びから始めがちですが、本来はビジョンや理論からスタートすべきです。この２つがあって、教師として核となる価値が決まると言っても過言ではありません。教育は将来のためにするのではなく、今、学習者が社会に出て生きていくことのできる力をつけさせるためにするのです。周りの社会がどんな人物を必要としているかを敏感に察知することが大切であり、どんなことがあっても教育を止めてはなりません。言語教育には文法的知識や語彙を教えて社会で使えるようにするという機能的目的がもちろんありますが、教育的目的もあります。言語を通して広い視野を身につけ、



異文化を持った人たちとうまく付き合い、人間力や社会力を高めることを目指す。それが教育的目的です。

人間の歴史の大切な転換期は３つあります。ハンムラビ法典ができた時、印刷機が発明された時、そしてテクノロジー主導の情報化社会である 21 世紀です。20 世紀は、工場のラインで働くような平均的な人間が求められていましたが、今世紀は人間の代わりをロボットがする時代になり、求められる人材はロボットを作る創造力のある人物となっています。21 世紀は 20 世紀のものを壊して新しくしていく「破壊的イノベーション」の時代なのです。インターネットは第３次産業革命と呼ばれますが、現在は第４次産業革命が起こっており、その間隔は非常に短くなっていることがおわかりでしょう。

ドラえもんの秘密道具は 500 ほどありますが、すでに 4、5 個は現実に存在しています。ニューヨークの 5th Avenue といえば高級店が立ち並ぶエリアですが、コロナ禍で軒並み閉店しています。しかし、ネイルサロンは好調です。つまり、生産者から直接買う産業の需要は衰退していないのです。ロボットは人間の経験をデータ化して、人間の代わりに仕事をします。私たちは人間らしさ、つまり人間力に着目すべきなのです。デジタル化しても出来ないことにこそ価値があります。

OECD は Vision 2030 の中で、「empathy（共感力）」を謳っています。言語教育においても、共感力を身につけさせることが大切です。学力観も変化してきています。これまでは教科の知識を身につけさせること、つまり学習して使えることがカリキュラムのゴールでした。新カリキュラムでは教科内容を学習する意義を理解し、人間力や社会力を培うことを目指しています。言語教育は人間教育なのです。米語では Global Citizenship、英語では Intercultural Citizenship の考えです。これを私は日本語では「地球市民」と呼んでいます。これからは change maker や influencer の育成が求められています。

大学の役割もパンデミック後に変化しました。卒業証明書は最初の就職活動時には役に立つかもしれませんが、それ以降は不要です。実際、昇進や成功につながる要因は、大学で学んだ知識が 25%程度で、75%は人間力だそうです。日本はガラパゴス化していると言われています。もっと人間力、社会力を高めて耐未来性を目指さなければなりません。専門的知識の価値は 20 世紀には 20 年もちましたが、21 世紀は 3、４年です。1997 年から 2015 年に生まれたいわゆる Z 世代は、一生で 17 の仕事、5 つのキャリア、15 回の引っ越しをすると予想されています。そのような世代には生涯学習能力を身につけさせる必要があります。これからは自分で考えて行動できなければなりません。仕事を変えていくことを考えると新しいスキルを身に付けられることが大切です。いわゆる生涯学習です。

人間力、社会力を「どう教えるか」ですが、言語教育ほど教授アプローチを気にかける教科はないと思います。なぜ外国語教育をするのかというビジョンを明らかにし、そのために何を教えたら良いのかを考え、それをどう教えたら良いか、という流れが新しい外国語教育を作ります。今は変化のチャンスです。教師の成功は、学習者が成功したかどうかによって測られます。

何人もの研究者たちが言っているように、教師から学習者に知識が移動するわけではありません。新しい知識が生まれるのは既存の知識と混ざり合って知識が変化する「相互作用型」か、新しい知識が学習者の中で消化され、現実場面において学習者の考え方や観点が変わる「変容型」であると言われています。Rigor とは、学習が engagement できるような最適学習環境や条件を言いますが、それを作ることが教師の役目です。学習科学のデータに基づいた良い教育方法を使って教えましょうということです。教育にも科学的バックグラウンドが必要とされてきています。

1990 年代にブッシュ大統領がこれからの 10 年は「脳の 10 年」とすると発表して、脳の研究に莫大な費用をかけました。その中で、脳の研究に基づいて学習方法や教授法を選ぶという Brain-Based Learning が出てきました。Bransford の本が大変有名で、Think-Pair-Share、Visual Cues、Suspenseful pauses などを使うと、学習効果が上がるということが科学的根拠をもとに述べられています。

Robert Marzano を中心とした人たちは、High Yield Instructional Strategies という、脳の研究に基づいてクラスで実験をし、こういう方法を使うと学習効果が上がりますということを発表しています。Marzano で検索して調べてみてください。

今、アメリカの教育で一番有名な研究は、John Hattie の Visible Learning です。High-Effect Size Instructional Strategies というものは、クラスルームで 1,800 種類の実験をしたのですが、30 万人の学生を対象に 146,142 の調査研究をしたというものです。ある教育方法を使ったクラスと使わなかったクラスを比べて、効果があったかどうかを見るということをしました。そして統計手法を使って彼は Effect Size を出して、その Effect Size が大きいものは学習効果が高い、低いものは効果が少ないことを明らかにしました。Effect Size が 0.4 以上は学習効果があり、我々が使っている教授ストラテジーの 92%は学習効果があるそうです。講義というのは効果がないわけではありませんが、限りなく 0.4 に近く、学習効果が低いということがわかっています。私自身、この研究を非常に参考にしていて、この中で学習効果がある教授ストラテジーを使うようにしています。皆さんにもぜひ参考にしていただきたいのですが、John Hattie が参考にした研究は必ずしも外国語教育ではないので、外国語教育に使えない教授ストラテジーもあります。また、あくまでも先生がどういうストラテジーを使うべきかという「教授ストラテジー」であって、学習者の「学習ストラテジー」ではありません。ホームページのリストには 252 の教授ストラテジーが掲載されています。

私はクラスの中で Engagement が起こる方法を使っています。つまり、能動的に学習者が活動に関与して、積極的に参加するようなものを取り入れています。コンテンツと Engage する、他の学習者と Engage する、教師と、自分自身と、社会と Engage するようなものを使っています。それから経験が大切で、学生に社会に出て言語を使う経験をさせます。その時に使うのが、I do、We do 、You do です。I do は先生がやってモデルを見せる。それをクラス全体でやってみましょうというのが We do。最後に自分一人でやってみましょうという You do です。

Sociality というのは社会活動ですが、できるだけクラスの中で人と何かをするということを意味します。社会の中で行われているのと同じような活動をクラスに持ち込むというものです。インターネットを使うことで、Social Connection を作ることができます。Learner Agency というのは、学生が積極的に自分が中心になってするというもので、科学的な裏付けがあります。私はこのような活動をするようにしています。

パンデミックも３年目に入ってわかったことがあります。Social Emotional Learning が注目されるようになりました。私は「対人間関係能力」と訳しています。この SEL を育成するように外国語を教えることが非常に大切であると考えます。SEL は 1990 年代後半からある考えで、CASEL という団体が有名ですのでこれも調べてみてください。人間として生きるための社会的、情緒的知識、能力の全てであると言えます。先ほど述べた人間力、社会力とオーバラップします。CASEL によると Competency Areas として５つあります。「自己認識」は自分のことをよく知る能力、スケジュールを立てるとか規律正しい生活を送るという「自己管理」、自分が社会の中でどういう位置を占めているかを理解する能力である「社会的認識」、社会の中で人間関係を作っていく能力である「人間関係スキル」、個人として社会的に責任のある意思決定を行うという「責任ある意思決定」といった能力を高めるような教育をするのが大切です。

パンデミックで家で孤立して学習をしていてうつ病にかかったり、学習へのモチベーションを喪失した学生がいました。SEL の能力を高めることによって、学習効果を高め、良い学習結果を生み出すということがわかりました。外国語教育の良い考えというのは幼稚園、小学校、中学校、高校まできても、大学で止めてしまいます。SEL も高校までの過程でよく使われていました。このパンデミックで私の大学でも SEL がよく言われるようになって、教育の中に取り入れていくことは大切であると気がつきました。

Maslow の人間の欲求のレベルがありますが、知識を与えるということよりも、まず感情を考えろということが言われました。その他にも Connection Over Content といって、学習内容よりも繋がりを作ることを意識するようにとパンデミックで強調されました。

SEL をクラスで実現するために「自己認識」や「自己管理能力」などの５つのものをクラス活動に取り込んでいくことができるのではないかと思います。SEL の活動と関係していますが、先ほど述べた John Hattie の研究では、教員と学生が良い繋がりを持つ、とか学生を名前で呼ぶなどの活動が学習効果を上げると述べています。Science と Art の融合です。

ここまで外国語教育の「なぜ」「何」「どう」の話をしてきましたが、ここからは今まで述べてきたようなものを使った教育というものはどのようなものなのかということで、私がクラスで実際にやっていることのお話をしたいと思います。

去年、一昨年とオンライン修学旅行を作るということをやりました。アメリカの大学の 2 年生の終わりのレベルで行ったのですが、それほど日本語ができる学生たちではありませんでした。内容は、パンデミックで修学旅行に行けない日本人生徒のためにオンラインの体験ツアーを計画、公開するというものです。日本の高校の先生と生徒にオンラインでインタビューをしたり、Google Forms を使ってアンケート調査をしたりしました。学生たちはグループで日本人生徒が行きたい場所を選び、その場所について調べ、体験ツアーを計画しました。そして Google Tour Creator などを使って、体験ツアーのサイトを作り、そのサイトで日本人生徒に体験してもらって、一番良かったツアーに投票してもらいました。最後にうまくいったかどうかを内省するというところまで全て日本語でやりました。プロジェクト型の学習です。この学習を通して、人間力、社会力を養うということをしました。

それから、日本語で Podcast を作るという活動も 2 年生の後半に行いました。Podcast はエンターテイメントだけではなく、コミュニケーションの道具や自己発信の道具として盛んに使われています。先ほどの「経験」につながりますが、学生は様々な Podcast を聞いて、分析しました。良い Podcast というのはどういうものなのかを分析をして、社会貢献できる内容ということが条件で Podcast のトピックを決めてもらいました。情報を集めたり、インタービューを入れたりしてスクリプトを書いて、Podcast を作って録音し、パブリッシュしてみんなにも聞いてもらいました。そしてフィードバックをもらって、内省するというものでした。ほとんどの学生は iPhone を使って Soundtrap という無料のアプリを使いました。

このようなことを通して、人間力、社会力を高めることができました。私のクラスのとても良かった Podcast というのは、日本の女の子たちを対象に科学を勉強しましょうと訴えるものでした。環境研究をする際に女性の視点を入れることによって環境が良くなるということで、子どもの頃からもっと科学を勉強しましょうという内容でした。日本人の女性科学者に直接インタビューするというものも Podcast に入れて作っていました。

予想していなかった効果もありました。私のクラスでは文法や語彙を教えるということはしていないのですが、Podcast を聞いたことによって日本語を聞く力が非常につきました。スクリプトを書いて読むということをしなくてはならなかったので、教えてもいないのにその

力もつきました。発音も教えないのに、とても良くなりました。さらにテクノロジーを使う力もつきました。

外国語を教えない外国語教育と呼んでいるのですが、オンラインの修学旅行を作るとか、Podcast を作るということが主目的で日本語を教える事が第一の目的ではありませんでした。でも、それをやっていくうちに日本語の力もつきましたし、人間として成長することもできました。人間形成の外国語教育です。

ここからは今が変化のチャンスであるという話をしたいと思います。今は、教室かオンラインかは別として同じ時間に勉強する「共時的学習」と個人個人が違う時間に勉強する「非共時的学習」がブレンドして行われるようになって、教育が変わってきました。Richard Haass は、「パンデミックは歴史を変えるのではなく、早く進ませる」と言いました。リモートワークにしてもオンライン授業にしても、実は将来そうなる予定だったものがパンデミックによって早く起こっただけで、急に起こったのではないという考えです。インドの女優であり、女流作家でもある Arundhati Roy は、パンデミックは一つの世界と次の世界の間の正門、入り口であると言っています。

ここで自分の教育を見直して、自分のいる世界を眺めてみて、それに合った教育をしているかを考える必要があると思います。これまで行ってきた教育を変えるチャンスだと思っています。今の教育はとても画一的で、同じ時間に全員で同じものを習うという授業形態です。フランスの Michel Foucault は、今の学校は刑務所であると言っています。イギリスの Sir Ken Robinson という教育学者は、今の教育環境では、世界の中で創造的に生きていく人間はできないと言っています。今の世の中で線上に流れていくように動くものは本当に少ないのに、学校教育では何でも線上に進んでいます。つまり、第１限が終わって第２限、第３限の授業に進んでいくとか、教科書も Lesson 1 が終わったらみんな Lesson 2 を勉強するというように線上に流れているということで、現実社会ではあまりありません。彼が言ったことでもう一つ重要なのは、我々の世界の中で正しい答えは一つしかないということはほとんどないにもかかわらず、学校のテストでは正しい答えは一つしかなく、それはおかしいということです。そういうことをやっていると現実社会で生きることのできる人間はできないと言っています。

今回パンデミックになって、教師付きの共時的な授業と家に帰って学習者個人が勉強する組み合わせのブレンド型授業になりました。学習者が個人でやる部分というのは、自分の自由な時間にできますし、学習者によって使う時間を変える自由があるわけです。そのため、学習の個人化とか区別化ができるようになりました。時間を有効に利用して、柔軟な構造になってきたということが言えると思います。ですから static、つまり静的な外国語教育から、クラスの壁を打ち破って外に出るようなもっとダイナミックな授業も可能な時代になってきたのではないかと思います。

なかなかパンデミックが終わらなくて、これからは with コロナなどとも言われていますが、もうノーマルが戻ることはないという時代になっています。前の時代に近いようになるのは、2025 年以降だと言われています。私はそれも疑わしいと思っています。新しい時代に対応した教育をしていく必要があるのです。John Dewey は、「今日の学習者を昨日の学習者に教えるように教えていては、学習者から未来を奪ってしまう」と言っていますが、私はそれは本当だと思っています。これまでの 20 世紀の教育を 21 世紀にやっていては、21 世紀を生きていく学習者を作っていくのは無理だと思います。

今日は外国語教育のなぜ、何、どうということでお話ししました。外国語教育の理念は皆さんそれぞれが持つべきものなのです。ぜひ自らの教育理念は何か、21 世紀の社会に適した理念であるか、社会が求める人材を自分のクラスから生み出しているか、そういう人間を生み出すために学習効果を上げることのできる何をしているか、それで良いのか、自分の教育をどう

いうふうに変えたら良いのかと言ったことをみなさんが自分でお考えになる機会ができれば私としても非常に嬉しいことです。

教育を大きく変えるのはとても難しいと思います。特に日本はそうです。ガラパゴス社会で、今の教育が良いと思っている人も多いですし、うまくいっているものをわざわざ変える必要がないので、教育を変える必要がないという人もいると思いますが、私はうまくいっていないと思っています。日本国内ではうまくいっているように見えるけれども、外国にいる者の視点ではうまくいっていないと感じます。教育を大きく変えるのは難しいのですが、みなさん一人ひとりが変えるということで良いと思います。それが積み重なっていくと教育を変えるパワーになると思います。自分の教育を変えるというのは、学校内にいると大変でリスクを冒すということもあると思うのですが、高いところを目指そうとするのならリスクを冒さないといけない。でもリスクを冒す価値があることだと思います。

今日の結論ですが、みなさんはとても重要な仕事をしていて、未来を作る人間を育てているわけです。ぜひ自分の教育が日本の未来を作るというような情熱を持って教えていただきたいと思います。これで私の話を終わりとしたいと思います。長い時間みなさん、ありがとうございました。

質疑応答

Q: 他の外国語教育は学校教育では一般的ではないですが、英語は世界中で教育されているので英語が話せなければ評価が下がるということはありませんか。

A: ヨーロッパやオーストラリアでは他の外国語教育もきちんと行われていますし、行われていないのは日本だけではないでしょうか。アメリカ人は外国語教育は興味がないと言われていますが、日本の何十倍も行われています。確かに英語は強いですが、これから中国の世界になる可能性もあると思っています。アメリカの地位がグローバル社会の中で下がってくると、英語の価値も下がる可能性が十分にあると思います。

Q: Podcast は比較的簡単にアプリで作れるのですね。生徒も音声で発信することができますし、ご指摘のように４技能を全て含みます。何より伝えたいことを発信できる喜びが動機づけに繋がりそうです。

A: 本当にそうです。先ほどご紹介したアプリはプロが使うようなものなのですが、アマチュアでも簡単に使える、使いやすいソフトです。パンデミックの間、教育で全機能を無料で使えるようにしてくれています。私はその便宜をクラスで使いました。Z 世代はテクノロジーに強いので、先生よりも使うのが上手です。

Q: ５Cs のスピリットは今でも健在ということでしょうか。

A: 5C というのはアメリカのスタンダードですが、World Readiness Standard と呼ばれていて、今でも使われています。

Q: Engagement を起こさせるというお話がありましたが、その中で I do、We do、You do と PPP との違いを教えていただけますか。

A: 比べることはできないのではないでしょうか。先生方は自分の弱みを「どう」克服できるかを考えて、自分のクラスに学習の最適条件を作るべきで、先生の能力も学習者の能力も違うのだから、これが絶対というものはないと思います。いろいろな事をすると批判は出てきます

が、自分のクラスでうまくいったのであれば自信を持って良いと思います。教育学というのは、サイエンスではないので、人が言っていることを鵜呑みにしない方が良いし、自分でトライしてみるということはとても良いことで、その失敗を恐れてはいけないのです。それが学生に良いモデルになって、21 世紀の人間力がついていくと思います。

Q: 高校で教えていると大学入試、大学では留学をするのにTOEFL、あるいは就職のためにTOEICなど知識を問うようなテストが多くあり、その対策が求められているように思います。21 世紀は知識よりも創造性が必要だったり、人間力が必要だということを本日伺いましたが、知識を問うような試験の形態は今後どのように変わっていくのか、先生のお考えをお聞きできればありがたいです。
A: 学習の段階の中で、知識の部分を外すことはできません。プロセスの中で知識を教えて、それをテストするというのは大切ですが、学習の最終目標というのは実用能力をつけるということであるべきだと思います。しかし障害は大学受験です。小学校から教えて高校まで、それだけのことができる授業時間数は十分にあると日本の英語教育の専門家が言っていました。それが達成できていないのは、大学受験があるからなのです。しかし、受験がなくなることはないだろうからどうしたら良いかという質問には、受験と自分のやりたいことの２本立てで行かざるを得ないと答えます。みなさんの教えている学生が、もっと人間力や社会力をつけて、未来を作っていこうという influencer とか changemaker になったら、その中から日本の教育を変えようと動いてくれる人ができると思うのです。Changemaker を作るためには、我々が changemaker にならなければならない。その change は英語教育の change です。

Q: 先生の本の中で Innovation を起こす時の３つの P があって、play、passion、そして purpose が紹介されていました。私たちはこれらをしっかりと持っていないと、理念がぐらついてしまうと思います。先生はどのような遊び心を持ってやっていらっしゃるのでしょうか。
A: リスクを冒してでも、面白そうなことをやってみるという気持ちは遊び心だと思います。人と違うことをやってみたいとか、まだ誰も見ていないところを見てみたいという部分があると思います。ゲームの要素を教育の中に入れていくことによって学習効果が上がるという Game-based Instruction とか Gamification がありますが、それも遊び心ではないかと思います。それをやることで辛いことも楽しくなるということが言えるのではないかと思います。

(文責　三浦)

お知らせ

◆研究大会の開催日（予定）について

第 12 回研究大会は 2023 年 2 月頃に開催することを予定しております。詳細につきましては、後日あらためてお知らせいたします。ぜひご参加ください。

◆会員募集について

実用英語教育学会では，新会員を募集しております。年会費は 4,000 円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になる他、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。SPELT の情報は下記の HP でご覧いただけます。

実用英語教育学会ホームページ　　http://spelt.main.jp/

◆紀要への投稿について

実用英語教育学会では、年に一度、実用英語教育学会紀要（SPELT　JOURNAL）を発行しております。投稿を希望される方は、9 月 30 日までに申し込みをお済ませください。詳しくは本学会のホームページの『SPELT JOURNAL 投稿規程』をご覧ください。

◆編集後記

今日の学校教育では、「学びを止めない」ためにオンライン授業が必須となっています。今回のご講演の中で、「将来そうなる予定だったものがパンデミックによって早く起こっただけである」と當作先生はおっしゃっていました。ドラえもんに描かれていたかもしれない未来においては当たり前のツールを今、私たちが扱っていると考えると、少しワクワクした気持ちになります。私たちの世代が、Z 世代の若者を influencer や changemaker に育てられたら素晴らしいですね。

本学会が、みなさんと実りの多い意見交換ができたり、お互いに刺激を与えられたりする場となれば幸いです。会員の皆さまにおかれましては、引き続きくれぐれもご自愛ください。

（文責：三浦）

実用英語教育学会
編集：*SPELT Newsletter*　編集委員（三浦寛子）
発行：2022 年 9 月 1 日
事務局：　〒065-8567　札幌市東区北 16 条東 9 丁目 1 番 1 号
札幌大谷大学 社会学部 地域社会学科 石川希美 研究室内
TEL:　011-742-1651（代）　Fax:　011-742-1654（代）
Email: spelt.info*gmail.com　　*を@にしてください。